

二 関係者近詠

店員の点呼の透けて朝曇	眞希子	小春日や妻の抱きし隣家の子	規雄
盆客に里子も入れて一升飯	全	— NHKテレビ11月11日 岸本尚樹選に	
我までも覚悟を決めて田草取	全	放映予定でしたが時間切れ。「NHK俳句」	
油照り地図を頼りに新居訪ふ	全	1月号に添削例として掲載予定の由	
静かにも厩舎大型扇風機	弘子		
兵児帯をゆるると念仏踊かな	全	子規愛でし木曾十一宿の栗おこわ	盛雄
ビニールのプールくたりと干されをり	全	菊日和定年のなき句会かな	全
原爆忌黙禱一分短かさに	全	萩咲くや一の砦の矢弾 <small>(やだま)</small> 痕	健介
天皇の小さく遠そく終戦日	全	野分あと浦一帯は古戦場	全
旅立ちも斯くの如きか妻午睡	青史	一押しの新酒酌まんと句友どち	紀久男
祖 <small>(はだぬぎ)</small> のをとは容れず踊りの輪	全	寄席はねて馴染の店へ秋の暮	
英霊のふたたびあるな送り舟	全	— 「きさらぎ句会」10月	
雲の峰摩文仁の民の悲の重層	全	終電車から吐き出され見る夜半の秋	允章
白桃食ぶ晩節けがすやも知れぬ	全	池の面に影きはやかや新松子 <small>(ちり)</small>	全
歌舞伎座「東海道中膝栗毛」	全	秋の蝶夜はいづくで眠るやら	全
テンポよき弥次喜多芝居暑気忘る	紀久男	角とられ飛車も危ふく秋灯下	恵洲
「盟 <small>(かみかけ)</small> 三五大切」	全	親に手を曳かれハロウインの魔女が来る	全
血みどろの夏芝居はね口直し	全	朝寒やさてと眩きすることなし	全
歌丸の人情噺に涼新た	全	— 大鉄会10月	
— 「森の座」11月号		大楠の鳥あまた容れ後の月	允章
人混みに菊の香紛れ神楽坂	正明	積み上げし薪の香の頭つ冬支度	全
知つてゐて知らぬふりする早生蜜柑	全	きらきらと東山より初時雨	全

三 稲畑汀子（虚子の孫でホトトギスの名誉主宰。伝統俳句協会会長）が歌舞伎座の9月「秀山祭」に寄稿した「初代吉右衛門丈のこと」について

— 秀山祭は虚子の高弟であった初代の俳号から取ったもので、養子に入った二代目（今の吉右衛門が初代の芸の継承を目指して七・八年まえから毎年9月公演しております。屋号である播磨屋一家（吉右衛門の弟子）はホトトギスに投句するなど俳句を嗜む人多かったようです。

- ◎冒頭に7句抄出
- 看板の大羽子板の歌右衛門 (一月) 立秋や箱根で逢ひし土佐太夫 (八月)
- 松過ぎて年始まはりの役者かな (一月) 一茶忌の句會すませて樂屋入り (十二月)
- 弟子たちの弓の稽古や若楓 (五月) 久々の下り役者や近松忌 (十二月)
- 蓮池の寺をぬければ芝居小屋 (七月)

◎句集をだしていることや「新歳時記 虚子編」に多数収められていること

一、ホトトギスに欠席投句して結果を早く知りたがった為、弟子が舞台の彼に判るように伝えました。私の調べでは恐らく手の指で選ばれた句の点数を知らせたのだと思います。当時異母弟の十七世勘三郎と得点競争が過熱しており、4点とつたら赤飯炊き祝宴したそうです。

二、初代の依頼で虚子が書き下ろした「髪を結う一茶」を昭和10年、東劇で初演。平成8年「ホトトギス」創刊百年記念に歌舞伎座で再演。（初代は昭和29年他界）

三、初代の舞台では「籠釣瓶花街酔醒」を見たときの感動が未だ生々しく忘れられないこと。

◎結びに一句
灯下親し初代吉右衛門文逸話 汀子